

安曇野 碌山美術館

2021/10/03

以前から一度は行ってみたいと思っていた「碌山美術館」に行きました。

この美術館は、日本の近代彫刻の礎を築いた荻原守衛（碌山）の作品と資料を永久に保存し、公開するために、1958年、碌山が生まれた安曇野に開館した美術館です。《女》《北條虎吉像》などの重要文化財指定作品も展示されています。

私の大学院の研究室の教授である北郷悟先生の研究室の机の上には、3Dプリンターで作られた碌山の《女》の像が置かれていたのです。その像に結構興味が持って、いつか本物を見たいと思っていました。



美しいガーデニングの中に、碌山美術館がある。中世の教会のような建築です。教会風の碌山館は、安曇野の象徴的存在。







この建物には、碌山がフランス留学時期に制作した初期の作品《杭夫》、肖像彫刻の傑作である重要文化財《北條虎吉像》、碌山の代表作「女」など 14 点が開館当時の配置のまま展示されて、館外に《労働者》と合わせて、碌山の全部 15 点の彫刻作品が設置されています。





14点というと少ないようですが、実はそういう事ではない。

もともと画家を目指して海外に渡った碌山は、フランスでロダンの《考える人》に衝撃を受け、画家から彫刻家に転身しました。その後、ロダン本人から指導を受けて、帰国しました。

しかし、帰国から約2年後、碌山は30歳という若さでこの世を去ってしまいます。そんな短い彫刻家としての生涯だったため、現存する彫刻は15点ほどしかない。



こちらは碌山の代表作《女》です。

碌山が亡くなる直前の1910年（明治43年）に完成した「女」は、明治以降の彫刻で初めて重要文化財に指定され、現在でも日本近代彫刻の最高傑作とされています。

《女》は、両手を後ろにまわし、顎を高く上げ天を見えています。上半身を空に向け、こうした苦しいポーズの表現は、苦しそうでないばかりか、どこが清々しささえ感じさせます。葛



藤を象徴するかのようなロマンにあふれ、苦しいポーズと達観したような表情と併せ持っているのです。体は悶えの姿にてあり、顔は相反する平和、膝から頭頂部にかけての螺旋状の盛り上がりは、碌山が求めた彫刻の生命力をすべて伝えている。それは、悲恋の絶望と苦しみを乗り越え、美の境地へと昇華した荻原自身の心象風景でもあるのです。

《女》では、碌山が想いを寄せる新宿中村屋の女将、相馬黒光（本名：亮）をイメージしています。また、碌山が黒光への想いを制作の背景とした《文覚》《絶望》の二つの作品にも触れ、代表作《女》の精神的深みや芸術的高み、そして時代におけるこれらの作品の斬新さにも迫っていきます。







ほかの建築ではさまざまな特別展や企画展も開催されていました。レンガ造りの建物が素晴らしかった。窓のかけと日差しがある展示空間は良い雰囲気が出ています。